市長賞

悼む時間

窪田　由佳子

「アイ・コウキチ　さん」
「アイイソ・エミオ　さん」
男性の名前を淡々と読み上げていく。
『四万六千三百人の死者たちの名前をリモートで刻む四十六時間』、このような企画の案内を受け、思い切って参加してみた。
これは『シベリア抑留者支援・記録センター』が主催、初めての試みだった。
今年は戦後七十五年という節目の年に当たる。戦没者慰霊祭を始め、様々な催しが計画されていたにも拘らず、新型コロナの感染拡大によってあらゆるイベントが影響を受け、縮小、延期や中止に追い込まれた。毎年、東京の千鳥ヶ淵で行われてきた『シベリア抑留死亡者の追悼式』も密集を避けて例年よりもずっと少ない人数で執り行われたようだ。
そこで、この『死者たちの名前をリモートで刻む四十六時間』という企画は、人は一ヶ所に集まることなく

パソコンや携帯電話によるリモート参加で行おうというわけだ。参加者は、わずかだがシベリア抑留体験者ご本人を始め、抑留者遺族、研究者や学生、新聞記者などの報道陣が集まった。私も遺族の一人として加わった。

実を言うと始めに誘われた時はあまり乗り気ではなかった。ズームとかリモートという言葉さえ馴染みがないパソコン音痴の私は、こういった催しには縁遠いと感じていた。以前リモート面談を行った時も、私のパソコンから音声が出ず、すったもんだして始めるのが三十分も遅れてしまった。

そんなことがあり気が重かったのだが、

「このままパソコンに不慣れだという理由で参加しなくて後悔しないの？」

心の奥から声が聞こえた。この数年、私は父が語っていたシベリア抑留について関心を持ち、関連図書や資料を集め調べてきた。シベリア抑留の実態がほとんど知られていないまま忘れ去られてしまいそうなことに危機感を抱いている。それにも拘らずこの企画に対し横を向いて通り過ぎることはできないと思った。

「ねえ、私のパソコンにはマイクがついていないのかしら？」

ちょっと猫なで声で娘に聞いてみる。娘は面倒そうな顔をしつつも

「うーん、そうみたいね。マイクを取り付ければいいじゃない。それとも、今回は私のパソコンを使ってみる？」

（よかった。協力してもらえそう！）

私は内心胸を撫でおろした。

イベントの案内には「ズームをインストールして、これが参加のＵＲＬとミーティングＩＤ」等々長い説明が続く。「死亡者名簿を開き、自由にページをめくれるように慣れておき、自分の順番が来たら画面を共有してポップアップ画像にする」そのような様々な指示が来て一瞬動揺するが、娘の助けを得て何とか開始のページまでたどり着いた。

今回、みんなで分担して読み上げる名簿とは、通称『村山名簿』と呼ばれるもので、やはりシベリア抑留体

験者である村山常雄さんによって作成された抑留死亡者名簿だ。
村山さんは大正十五年、新潟県生まれ。私の父と同世代の方だ。満州ハルピンの水産試験場勤務。一九四五年に召集され、陸軍に入隊。敗戦と同時にそこからシベリアに送られ、四年の歳月を捕虜として強制労働に従事された。劣悪な環境の収容所に入れられ、酷寒と飢えと闘いながらの労働だった。
村山さんの妻、カズさんの証言によると、村山さんは家族にシベリアの話は一切しなかったけれど、毎晩のようにロシア語でうなされているのを隣で聞いて来たそうだ。そして結婚して十五年経った頃、
「あんたはシベリアに行かんといかん」
そう促して二人でナホトカ行きの船に乗りシベリアの土を踏んだ。村山さんは仲間が眠る墓地にウイスキーをふりかけ、帰りの船の甲板で号泣する。
そこでカズさんが詠んだ歌。
「青春を埋めし土地というハバロフスクに今われ立ちぬ嗚咽する夫と」
村山さんは、七十歳の誕生日を期に《シベリア抑留中死亡者データベース》に着手。旧ソ連からの名簿や、抑留者団体の記録などを手掛かりに一人一人の名前を確認していく。ロシア人係官による聞き取りには誤記も多く、その判定には膨大な時間を要した。
「戦争の犠牲となった仲間を悼み、その名を正しく歴史に刻む営為は、生き残った者の当然の責務」との信念から作成を始めた名簿は、十年の歳月を要して完成した。その偉業に対し、二〇〇六年吉川英治文化賞を受賞される。
私が村山常雄さんの名前を知ったのは、美智子様が皇后の時に発表された八十歳を祝う誕生日のメッセージの中だった。美智子皇后はシベリア抑留者にも心を配られていることを知り、有難く、感激した。そして村山常雄さんのような地道な活動家の存在に驚いたのだった。村山さんの、自分と同じ境遇にいて生きながらえることのできなかった仲間たちを悼む旅は、長く孤独で重りを抱えて歩くような苦行であったろうと思う。

さて、『四万六千三百人の死者たちの名前をリモートで刻む四十六時間』は八月二十三日夕刻に始められた。この日は旧ソ連の独裁者スターリンが「労働に適した日本人を五十万人連行せよ」との秘密命令を出した日として知られている。この日から延べ三日間、約四十六時間かけて名前を読み上げていく。

私の参加は翌二十四日と二十五日の朝七時から一時間ずつ。二千人の名前をゆっくりと読んでいった。

名簿には「クグマタ・キヨム」「クゲタ・ミシロウ」など、まずカタカナ表記、次に漢字表記、生年、軍隊での階級、死亡年月日、地域、埋葬地、埋葬の所在地という順番で記されている。漢字表記の分からない人は大勢いて、カタカナ表記でさえも不明確な人もいる。生年、死亡年月日さえ空欄のままの人もいて、痛ましい。

「クゲヌマ・イサム　さん」

四万六千三百人という人数の関係で、基本的にはお名前だけを読み上げる。ただ、名前も不明確な人は、生年と死亡年月日など、分かる情報を読み加えた。

「次の方はお名前が判明しません。一九二〇年生まれ、一九四六年十二月お亡くなりです。クジワラ・？　さん」

こうして一人一人の名前を読んでいると、これが皆シベリアで亡くなられた方々なのだ、まだ若い青年も多い、どんなに無念だったことだろう、そのような思いが浮かんでくる。きっと親御さんは我が子の幸せを願い、想いを込めて名前を選ばれたに違いない、本人はどんなことを感じ考え生きていたのだろう。名前は本の背表紙のようなもの、その本のページをめくればきっとそれぞれの物語が広がっていることだろう。

名簿の文字が滲んで読み辛くなる。目を瞬かせながら、約一時間で千人の名前を読み上げる。遠いロシアの地、七十年以上も遡る時の隔たりを飛び越えて、それぞれの死の重みが私の魂を揺さぶってきた。それは自分にとって思いがけない体験だった。

読み終えてふと我に返ると、何か特別で厳粛な時間を体験したような感慨を覚えた。

実際にはシベリア抑留死亡者は六万人を超えると言われている。この村山名簿に載っていない方が一万数千人もいるのだ。今年は新型コロナ騒動で戦争を振り返る行事も減って、戦争は遠のいてしまうように感じられる。しかし、こうしてこのイベントに参加してみると、単に名簿を読み上げるだけの作業ながら、一人一人の存在が浮かび上がり、それぞれが生きた証を忘れてはならないという気持になってくる。

「この本、けっこう読みやすいよ。読んでみたら」

夫が「図解・太平洋戦争」という本を紹介してくれた。私は父の体験したシベリア抑留について調べているが、日本や世界の近代史について知らないことが多い。なぜこの戦争が起きたのか、どのように展開し集結させたのか。歴史を知ることも必要だろう。シベリア抑留死亡者六万人、第二次世界大戦による戦没者三二〇万人と、一括りに数字で片づけるにはあまりに重いそれぞれの存在を、私たちは忘れてはなるまい。

今はコロナ禍により社会が音を立てて変わっていくことを、私たちは体験している。今までの安穏は吹き消されようとしているが、災い転じて福となるのだと信じたい。たった七十五年前にあれほど理不尽な戦争という災いを人々は経験し、逞しく新たな社会を作り上げてきたのだから。

目の前の禍に誰もが振り回されている。だが、少なくとも戦争に巻き込まれて亡くなられた命を悼むことを忘れずにいよう、そう思った。